博士論文要旨

# 東西ドイツにおける「国民的記憶」の形成と変容
# －第二次世界大戦とホロコーストを中心に－

立命館大学大学院国際関係研究科
国際関係学専攻博士課程後期課程
たなか　なお
田中　直

本学位論文の目的は、東西両ドイツにおいて、第二次世界大戦、特にホロコーストの記憶がそれぞれいかに国民化されていったのかを明らかにし、その形成と変容過程を再構成することである。とりわけ、これまであまり語られることの無かった東ドイツにおける「国民的記憶」の形成と変容を西ドイツのものと比較をしながら検討した。

第 1 章では、西ドイツにおける「国民的記憶」に関して再考する。西ドイツの国民的記憶については、「過去の克服」の観点から、すでに膨大な研究がなされており、1980 年前後を境に、「加害者としての記憶」が共有されるようになったことが指摘されている。本章では、この転換について、これまで言われてきた原因（主にアメリカで製作されたテレビドラマ「ホロコースト」の西ドイツでの放映）以外の点から考察を加えた。それは 70 年代後半における西ドイツ社会での「世代交代」や「日常史」の登場であり、これらが 80 年代以降の西ドイツにおける「記憶の転換」の根底をなすものであることを明らかにした。

一方、東ドイツについては、未だ「第二次世界大戦」や「ホロコースト」の扱い、そして「国民的記憶」に関して、そのコンセンサスが形成されていない。そしてその研究水準も西を対象としたものと比較して、同じとは言い難いのが現状であり、そこでは東ドイツ国家が存在した 40 年間における「国民的記憶」や「歴史」の変容に関しても具体的事例を持って検討されてこなかった。そこで、第 2 章では、具体的に東ドイツにおいて出版された歴史教科書の内容を改訂版ごとに分析することで、この国家が公式に表明した「国民の歴史」や「歴史観」の一端を捉えた。そして同時に、時代ごとにおけるそれらの変化の実態を明らかにした。

また、第 3 章では、東西ドイツにおける「記念政策」を「ホロコースト」の扱いを中心に、記念碑の分析を通して比較検討を行い、それぞれの国家における「国民的記憶」の変化の過程を提示した。この比較から、両ドイツの時代ごとの「国民的記憶」の変遷と再構成、そして両者の相違点と、さらには共通点とが明確となった。

このように、別々の「国民的記憶」を形成してきた東西ドイツであるが、現在の統一ドイツの「国民的記憶」は、主に西ドイツで形成されてきたものを基盤として形成されている。終章では、そのことが孕む問題点について、改めて考察した。「記憶の歴史」を問うことは、現在、そして今後のドイツを考える上で必要不可欠の要素なのである。

Abstract of Doctoral Thesis

# Formation and Changes of “National Memories” towards World War II and Holocaust in East and West Germany

Doctoral Program in International Relations
Graduate School of International Relations
Ritsumeikan University

たなか　なお
TANAKA　Nao

This dissertation sought to clarify how memories of World War II, especially memories of the Holocaust were nationalized in both East and West Germany. In particular, it examined the formation of “national memories” and related changes that had not been discussed in the past by comparing the cases of East and West Germany.

The first chapter examined the reasons of transition in “national memories” in the 1980s. Besides the influence of the TV drama “The Holocaust,” the introduction of a “generation transition” and a “history of daily life” in the late 1970s were found to be the basis of “memories transition” after the 1980s in West Germany.

However, in the case of East Germany, the situation was totally different. Besides “World War II” and “The Holocaust” were not being concerned, consensus of “national memories” had not yet formed. Therefore, it was difficult to say that the number of “national memories” studies in East Germany was comparable to West Germany. This situation also explained why there was no specific case study in the transformation of “national memories” or “history” even East Germany had 40 years of history.

The second chapter explored the official “national history” and “historical perspective” in East Germany by analyzing the content of each revised edition of history textbooks that published in East Germany.

The third chapter clarified the transformation and reconstruction of “national memories” in both East and West Germany by comparing and analyzing the monument stones which built in the period when both East and West Germany were practicing holocaust related “memory policy”.

This dissertation concluded that both East and West Germany built their own “memories” and “histories”. This implied that the national history and memory would keep changing in the Federal Republic of Germany. These “memories” and “histories” were seen as a camel’s nose under the tent in contemporary Germany.